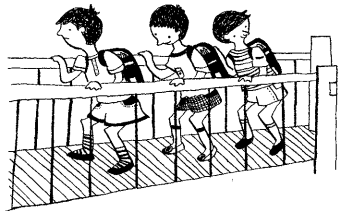


# 環境に内在する道草

水月昭道



ある晴れた日の道草

初夏の風が気持ちよく吹き抜けていたある日、私はユーヤとその仲間に誘われて一緒に道草をすることになった。ユーヤは知り合いの息子さんで、小学四年生になる。四年生にしては大きく見えるが、クラスでは中くらいらしい。身長に比べて体つきはほっそりしている。

剣道をやっている彼は、仲間たちと一緒に外を駆け

巡ることも大好きで、山の斜面に沿って広大な田んぼの広がる自宅周辺は、彼と彼の一派の、完全なテリトリーとなっている。手を引かれた私が、まず最初に連れて行かれた所は、田んぼのそばを心地よいリズムと音を奏でながら流れる、彼らお気に入りの小川だった。

「あー、おるおるー」

川幅が一メートルに満たず土手も五十センチメートルほどの高さしかない小さな川に架かる、これまた小

さなコンクリート造りの橋の底を、ぐっとしゃがんでのぞき込んだユーヤたちは、そこに無数に泳ぐ小魚を見つけ歓喜の声を上げたのだった。

時折差し込む太陽光によって、キラキラと光る背びれを見せる小魚の群れが水の中をすーっと移動していく。それを追いかけるようにして、ユーヤたちは土手に沿って走っていく。次の橋のたもとまで走ったとき、彼らはまた新しい生き物を発見した。それは、川縁をゆつくりと移動する沢ガニであった。突き抜けるような青空の下で、散歩を堪能していたであろう沢ガニくんは、あはれ、あつという間に彼らに捕まってしまった。

「大きかばい。食べれるつちやなかと？」

彼らは口々に獲物を見定め盛り上がっている。すると、次の瞬間、ユーヤの手からカニが滑り落ちた。ここぞとばかりに素早く動いたカニは土手の横穴にあるという間に逃げ込んでしまった。だが、彼らはそんなことにまったく落胆してはいなかった。

「次は幽霊屋敷に行くばい」

すぐさま次の目的地が誰かの口から示された。田んぼのあぜ道を次々に走るユーヤ一派の後を必死で追いかけていると、上り坂の向こうに一軒の古ぼけた家が見えてきた。ひさしの深い平屋建てで、外から見ても田の字平面が想像されるその古家は、典型的な農家そのものであったが、現在、人は住んでいないようだった。屋敷の手前まで来たユーヤたちは、突如立ち止まった。

「じゃんけんするばい」

じゃんけんで負けた者が、玄関を三度たいたいて逃げてくるというゲームがここでの遊びだった。負けた一人が、恐る恐るボロボロの玄関に近づいている。

「早く行けー」

勝ち組は後ろからはやし立てる。その声に後押しされるように、ついに玄関の前まで到達した仲間内でもちよつと太った男の子は、顔を後ろの仲間の方に向けてながら目をつぶって三度扉をたたき、すぐさま仲間の

方へ向かってダッシュした。それをきっかけに、集団は次の場所へと全速力で走りだした。

「ナカムラさん家は抜けようぜー」

塀も何もない、代わりに鬱蒼とした足の長い草の茂るその家の横を駆け抜け裏手の方に出ると、そこにはまた別の川が流れていた。

今度のは少し大きい。幅は約二メートルくらいか。

ふと見ると、そこに細身の板橋が渡してある。手すりは無い。どうやら手作りのようだ。川底は結構深く、落ちればけがをするだろう。橋の手前で体を硬くしていた先頭の子どもがふと声を上げた。

「渡るばーい」

幽霊屋敷と同じく、何とこども、彼らの肝試しの場所だった。号令の下に一条乱れぬ隊列で、大人の肩幅より少しだけ広いくらいの橋の上を、ゆっくりゆつくりと子どもたちは歩いていく。全員が向こう岸に着いた途端、彼らはまた走りだした。

こうして、いつまでも終わりが来ないのではないか

と思えるほど、この日の道草は続いていったのだった。

## 環境と身体

私の子どもたちと一緒にやってこのような「道草」を体験し始めたのは二〇〇〇年の春からであった。以来八年。さまざまところで、多くの子どもたちと道草を行ってきた。

それぞれ異なる地域環境の中で、子どもたちが環境との間において切り結ぶ「環境体験」を、大人の身体を有する私共になぞってみる。そうしたことを繰り返す中で、私なりに「子どもの道草」というものをとらえてみたかったのだ。

この体験は、私に新鮮だがどこか懐かしい感じをもたらししてくれた。それは特に「さわる」という行為の中にあった。道草をしている最中、子どもたちは常に何かにさわりまくっている。道草の草に、川の水に、土手を歩くカニに、田んぼの土に、古ぼけた家の扉に、塀に、魚に、雑木に、とにかく興味の赴くままに

彼らは“手”でもって環境との接触を試みていた。

それは、はるかな昔、私にも確かに経験されたものであったはずだが、いつのころからか忘れさっていた行為だった。だが、手で土に触れ水に触れ、ぬれた手を乾かす時に空気を感じたとき、私には幼かったかつての記憶が鮮明によみがえってきたのだ。それも“手のひら”のうえに。そしてそれは、私が育った街の感触そのものであった。

この時、私はある一つの確信を得た。子どもの環境体験は、手や足といった身体に蓄積されるということ。道草の行動観察から、手や足を使った接触型の行為が多いことは、これまでの調査で判明していた。それがいったいどこへ繋がっていたのか。子どもたちと同じ環境体験を通じて、答えが浮かび上がってきた瞬間だった。

幼きころ、住んだ街の想い出は、私の脳ではなく手にこそ宿っていたのだと。私の“街”は、私の手と確かに“繋がって”いた。長い時を経て、全く異なる場

所で、全く瞬間的にそれが理解されたのは不思議だった。

私はさらにそれを確かめるべく、しばらくして子ども時代を過ごした街へと足を向けた。福岡市の西に位置する母校へと着いた私は、すぐさま校長先生にお願いして、子どもたちと道草をする許可を得た。

放課後、子どもたちと校門で待ち合わせをし、家路へと向かう時空間を共にする。先生の目が届かなくなる距離になると、それまでしおらしくしていた彼らが急に生き生きと嬉しんだ。

帰る方向は、かつて私が住んでいた家のある向きである。帰るには、正門から外周をぐるりと回り、反対方向へと歩かなければいけない。このコースには、かつてもちよつとだけ嫌な気分になっていたことをふと思い出した。戸建て住宅の立ち並ぶ街道沿いは約三十年前とそれほど大きな違いはないように見えた。私にとつても勝手知つたる道である。子どもたちが、いったい何を教えてくれるのか期待した。

彼らが最初に始めたのは、ピンポンダッシュだった。さすがに、ピンポンを押すことは私には無理だったが、ダッシュは一緒にさせてもらった。これが次の動きに繋がっていく。人の家の前からあわてて逃げるため、本来の帰り道とは異なる脇道に逃げ込むことになるからだ。そして、彼らが選択した道は、道無き道であった。つまり、塀の上によじ登り彼ら独自の子ども道を移動するのである。

そういえば、かつて「私の街」には確かに垂直方向に繋がる道があった。私たちは、街を水平方向の面としてだけでなく、三次元の立体として認識していたはずだ。身体を使うことによって、さまざまな当時の想い出がよみがえる。それと同時に、私の身体と街がだんだんと繋がっていく感覚に襲われ始めた。

いったん、地面に降りた彼らが向かった先は、私にも記憶が残るあの道だった。それは、子どもが体を横にしてギリギリ通れるというような、塀と壁に挟まれた秘密の抜け道だった。今の私には到底無理な道であ

る。だが、確実に無駄なことはわかっているながら、体をそこに入るだけ滑り込ませてみた。すると、きな臭いほこりくささと共に、ひんやりとしたコンクリートの感触が、私をあとという間に過去へと連れ去ったのだった。三十年近く前「僕はここが大好きだった」。

### 共鳴する私と街

街の記憶が身体の中に閉じこめられていることは間違いない。そして、普段それは自覚されないけれども、環境との道草的なかわりの中で、ふと思いつき起こされるものである。

ジェームズ・ギブソン（アメリカの心理学者）は、環境の中に内在する情報のことを「アフォーダンス」という概念で説明づけたが、これは環境との相互作用の中で「どんなことが可能となるのか」という視点を提示してくれる。たとえば、道に大きな石があれば、そこに「座ることが出来る」という情報（アフォーダンス）を、私たちは読み取ることが出来る。道草を通

した環境体験の質を把握しようとする場合、このアフォーダンス概念へ、時間的契機に根ざした情報が挿入されると、さらなる深まりに到達できる可能性が見えてくる。

ある環境との相互交流を環境体験の一つのユニットと見なすと、特定の場所において対応するアフォーダンスが確定される。だが、その時点では、生物としての行動可能性が説明されるにすぎない。もし、そのユニットを長時間のスパンの中に位置づけたとしたらどうであろうか。狭い壁の間を通ることや、街を三次元に使い倒すことは、もはや「今の私」にとって不可能としても、「かつての私」と環境との間に構築されていた一つのユニットとしての記憶は、「消えることのない情報」としてそこに留まるのではないか。つまり、土地における記憶の蓄積を説明するモデルとなることができるのだ。

「身体と環境は共鳴している」。私が、子どもたちとの道草体験を共有する中で、身体化された知である。

それは、必ずしも一過性のもではなく、人生という時間軸の流れのうえに、浮かんだり沈んだりしながら、一つの環境体験として薄れることのない記憶となつて、「私たちの歴史」を構築する基礎となつているのである。これらの積み重ねが、私たちの心に故郷への原風景をつくり上げているのかもしれない。

約三十年ぶりに訪れた故郷において、私は身体が環境にとけ込んでいくような錯覚を覚えた。それは、あたかも環境が私の手の一部となつたかのような感覚であった。そして次第に、不思議な安心感が自らの中に広がっていった。まるで、長いこと忘れていた身体の一部を取り戻したかのように。故郷での道草は、「僕」とそこで確かに再会していたことを「私」に感じさせずにはいらなかった。

(立命館大学衣笠総合研究機構)

人間科学研究所研究員・浄土真宗本願寺派僧侶・教師

著書『子どもの道くさ』（東信堂）

『高学歴ワーキングプア』（光文社新書）